

研究課題：口腔ケア介入による高齢者の認知機能や ADL の維持・改善効果に関する研究

研究者名：角 保徳¹⁾、梅村長生²⁾

所 属：¹⁾ 国立長寿医療研究センター 歯科口腔先進医療開発センター 歯科口腔先端診療開発部

²⁾ 愛知三の丸病院歯科口腔外科

【研究目的】 継続的な口腔ケアは、誤嚥性肺炎の予防だけでなく、要介護高齢者の栄養維持に有用であることが報告され、多くの病院や施設などで口腔ケアの普及への取り組みがなされている。しかしながら、口腔ケア介入による要介護高齢者の ADL や認知機能への効果に関する報告は少ない。本研究の目的は要介護高齢者に 1 年に及ぶ口腔ケアによる介入を行い、継続した口腔ケアが要介護高齢者の ADL、認知機能および血清 C 反応性蛋白値（以下血清 CRP 値）への影響を評価することにある。

【対象と方法】 無作為に 2 群に分けた特別養護老人ホーム入所要介護高齢者 53 名に、口腔ケア支援機器による 1 年間に亘る口腔ケア介入を行い、①ADL の評価としては Barthel Index、②認知機能の指標として Mini-Mental State Examination (MMSE) および③全身の炎症の評価として血清 CRP 値を研究開始時および介入 1 年の時点で測定し、比較検討を行った。介入前後でデータの採取できた対象者は、口腔ケア介入群は 27 名、対照群は 26 名であった。統計ソフトは SPSS を用い、介入前および介入後の各時点での指標の比較については 2 群間の有意差の有無を統計的に評価した。

【研究結果】 口腔ケア介入による ADL の変化は、口腔ケア介入群および対照群で、Barthel Index は介入前後で有意な低下（介入群 $P=0.012$ 、対照群 $P=0.002$ ）が認められた。口腔ケア介入による認知機能の変化は、口腔ケア介入群および対照群で、MMSE は低下するも介入前後で有意差（介入群 $P=0.154$ 、対照群 $P=0.08$ ）が認められなかった。口腔ケア介入による全身の炎症の変化は、口腔ケア介入群では、介入前後において、血清 CRP 値は有意な低下（ $P=0.004$ ）が認められた。一方、対照群では、血清 CRP 値のほとんど変化は見られなかった（ $P=0.819$ ）。

【考察】 本研究では、1 年間の口腔ケア介入を行ったが、介入群と対照群の両群において MMSE と ADL の介入前後の差に有意な差を認めず、口腔ケア介入による ADL や認知機能の維持・向上の明確な可能性は認められなかった。過去の文献と総合すると、要介護高齢者の MMSE や ADL の維持には、器質的な口腔ケアのみではなく、義歯補綴治療等を含めた機能的な回復が必要であることを示唆しており、この点を立証するためには、大規模な治療介入研究が今後必要と思われる。一方、血清 CRP 値は口腔ケア介入群で有意に低下し、口腔ケアを行うだけでも全身の炎症が低下することが示唆された。

【結論】 継続した口腔ケアは、全身の炎症の低下や栄養の維持に有効であり、今後、継続的な口腔ケアの施行が高齢者の全身の健康の維持において必要なものであることを広く国民に提言し、口腔ケアを歯科界全体として広めていく必要がある。